

むかいかごのなかのいど 迎駕籠野中井戸

〔解説〕

元文三年（一七三八）大坂豊竹座初演。原田由良助作、並木宗輔添削。

元禄初期、梅洪吉兵衛という悪党が丁稚を殺して金を奪い死骸を井戸に捨てたという事件があり、これを脚色した作品が歌舞伎・浄瑠璃で数多く作られ、「梅の由兵衛」ものとして定着しました。特に歌舞伎では、初代澤村藤十郎が由兵衛を演じて大当たりし、以後、由兵衛の装束の頭巾が宗十郎頭巾として知られるようになりました。

〔聚楽町の段 あらすじ〕

由兵衛と女房の小梅は、盗まれた主人の刀を質屋から取り戻すため、百両の金の工面に苦心しています。明日にもその刀を請け出したいという人がいるというので、今夜中に金を作らなければなりません。そこへ小梅の弟の長吉が、奉公先の為替の金、七十両を持ってやってきます。長吉が金を持っていることを聞いた由兵衛は、小梅を使いに出し、金を奪おうと長吉に切りつけたところへ小梅が戻ってきて、残りの三十両は身を売って作ったと言います。長吉は、実はその七十両は、姉夫婦のために奉公先から盗んだものであると告げて息絶えます。夫婦は涙ながらに、長吉の死骸を野中の井戸へ葬りに行くのでした。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

聚楽町の段

案じて居たりける。

「イエ／＼私は昼から平野へ、為替の金受取に行つて、日が暮れたら、ここにでも又先にでも泊まつて、

こいと番頭殿の云付け、即ち金もこれ／＼に」

と、首にかけたる小財布を、どっかり下ろせば、小梅はびっくり

「ム、そして其の金は板金か。何程ある」

「イエ／＼小判で七十両」

「ヒアアノこの金が小判で七十両。アノ此の金が。テモアあなたと有るのう。有る所には有りあまり、子供のそなたに持ち歩かせ、何とも思わぬ身代に、半時でも成つてみたい。コレ／＼人が見たらつい取るぞや、大事に首にかけて居や、昼から出たらひもじかる。ドレ茶を入れて飯おませ」

と意見と共に去なしかけ、弟所へいかぬ苦を、又もなら、早う去んでお返事いや」

飛ばして、急ぎ行く。

はや入相の鐘故に、命取らるゝ長吉は、夏の虫かや燈火を、燈す時分に來かゝりて、

「姉様お内にごさるか」

と、立入る弟は邪魔ながら、素氣無う云はれず惚れ／＼と

「オ、よふおじやったの。何時見えても愛想も無し、布子の裏も染めて置いた、近い内に仕立てやろう。

モ如才でない忙しき。コレ長吉、云ふ迄は無けれど

も、随分と奉公大事、親方の物塵一本、粗末にせまい違へまいと、心願掛けて勤めてたも。お使ひの戻りなら、早う去んでお返事いや」

と意見と共に去なしかけ、弟所へいかぬ苦を、又も

と立たんとすれば

「イヤ私が沸かして食べませふ、茶のある所も知つて居る」

とかい立つて釜の下、焚きに行く影、後影、見送る姉はアノ金をならばせめて半分の、主はどうして遅いぞと、見るや表へうとくと、一荷の桶に明礬の筒や箒を看板に、我門までも、梅やしぶ茜、金の才覚が

てらには、日暮れて道も急がしく、戻るや否や、
「コレ／＼由兵衛殿、急な事／＼。今日留守の間へ勝次郎様がお出でなされ、明日中に刀を請ける人があると質屋の噂。それをお前に知らさうといふて来てじゃあつたわいの」

と聞くよりびつくり、

「ナ、なんとそれ請けさしてたまるものか。その刀が手に入らねば大事の主人の家は断絶。それが無念な女房」

と了簡付けるも夫の気休め。由兵衛も打ちとけ顔

「何と女房十文呑んで寝ようかい」

「オ、ほんにいつそ夫れもよからう。デエ／＼買ふてきませふ」

と何心なく立ち出でしが、立ち止まり

「コレこちの人、刀の金は百両じゃの」

「ハテ知れた事、夫れを尋ねて何にする」

「サアもし道に落ちてあつたらそのうち百両拾ふて戻るぞへ、待つて居や」

と云ひ紛らして聚楽の町の横町とぼ／＼と、酒屋のかたへたどりゆく。

後には心一決の、由兵衛は門の口、かけがね掛け
て押し入れの、脇差そつと懐へ、かくして勝手を差
覗き、

「オ、長吉来てか、此中は逢はなんだが変わる事も

と語れば共に涙ぐみ

「さう有れば尤も、わしも思はぬ罪作り。最前長吉が為替の金、七十両請取つて来ましたと、見せた時のその欲しさ」

「何といやる、アノ長吉が七十両、金持つて来た、さうしてもういんだか」

「イエ／＼道の用心を思ひ、今夜はここに泊まつて居ます」

「ム、／＼そりやよう泊めやった。よい思案、分けて此中は物騒な。明日疾ふからいんだがまし／＼。

イヤ扱と、何しよかい。今夜はマアとつくり思案して是非とも出来ずば質屋へ渡り、わが身の云やる通りせりふせふかい」

「オ、それが上分別、一寸延びれば尋延びる。案じて済まぬは金事」

なかつたか。サアまあこちへ」

と猫撫での声に引かれて

「オ、今お戻りなされましたか。姉様はどこへ」

「ア、イヤ女房は使いにやった。マア／＼こちへ／＼」

と片脇へ連れ行き

「コレ長吉、今のはあるか」

「今のはへ」

「ハテ小判は懐にあるかと云ふ事。親方の物大事にかけたが良いぞや」

と云ふにさすがは年足らず、懐の財布取り出し

「金はここに七十両、首にかけております」

と見せたが因果ぞ、髪立つ程欲しく、女房の帰らぬ内と脇差に手をかけてはちやつと引き、抜きかけては押しかくし、心は早鐘時の鐘。初夜か半時か反

乱の、刃も共に乱れ焼き、抜き放したる折からに、女房小梅が門の戸を叩いて

「わしじゃここあけて」

と、云ふはたしかに姉の声

「待たんせあける」

と長吉が立つて行くを後から急ぎにせいたる三刀四刀。うんとのつけに返る音。胸にこたへて門の戸を引きしやなぐればかけがねはずれ、明いた口さへふさぐ間のないにうろたへ由兵衛は、ありあふ染物手負いに冠せ

「女房ども、サ、酒買ふておじやつたか、テモ早かったの、く」

と齒の根も合わぬ風情なり。

「オ、遅いか早いか知らねども、サアく一つまゐれ」

と茶碗さし出し、受ける人も注ぐ人も共に慄ふて傾

くる徳利の口からばら／＼と、出づるは一步茶碗に

一杯。さすがの由兵衛びつくり仰天

「女房ども此の金は」

「アイ百両に足らぬ七十両、足さうと思ふて筋迎ひの肝入り殿の処へ往て、島の内の木幡屋へ、勤め奉公する筈で、マア証文はあとへ廻し、わしが心を吞込んで、取り代へてもらふたその金は一步で丁度三十両」

「ム、そんなら勤めしてくれるか」

「コレ由兵衛殿、長吉はもふ死に切ったか。息がするなら逢はせて」

とわつとばかりに泣き出だす。

「コリヤ、声が高い、近所へ聞こえるがな。小の虫を殺し、大恩報ずる今宵の仕儀。刀さへ取り戻さば弟

の敵、存分にならう女房」

と事を分け理を分けし言葉に女房涙を押さへ

「ソリヤ聞こへぬ由兵衛殿。存分にする気ならわたし勤めに行きはせぬわいな。お前の為に御主人なれば、わしが為にも御主人様。その大事に及んだ今宵、わしさへ欲しやと思ふた金、取るを無理とは思はねど、殺して迄とは由兵衛殿、せめて死に目に会いたい」

と駆け寄つて抱き起こし

「コレ長吉、姉じゃ、小梅じゃくくわいの。さぞわしとも憎かるう、がコレををよう聞いてたも。

最前話した刀の事、外の手へ渡すとの、お国のお主ご一家中は、オどふお成りなされふやら、そなたが死んで此の金が御用に立つとの、幾人共なふお命助かり、仏も及ばぬ、コレ慈悲なるぞや。それをせめて

の心ゆかしに、コレお念仏申したも」

とすゝめ嘆けば目を開き

「姉様わしは切られいでも、死なねばならぬ事がある」

「ム、何と言やる、死なねばならぬ事があるとは、

そりやマア何故にや」

「さればいの、此中来た時段々の話、痩せるも金故貧ゆゑと、聞いた時のその悲しさ。エどうぞと思ふ心からわしや此の金は盗んで来たのじゃわいの」

「ヤアくく」

「サア来ると進じよと思ふたが、親方の物塵一本粗末にすなどの御意見、どふもやるふと得云わいで、見せびらかしてく居ましたわいの。エたった一人の姉様何ぼ程孝行にしても、仕飽きはなけれど、丁稚の内は自由ならず、盗んでなりと苦を助け、後

ですぐに身を投げて、最期は小初瀬の野中の井戸と
わしゃ来しななのコレ、死ぬるところまで見て来た
わいの」

と縫り付き、しゃくり上げたる有様に、小梅は身も
世もあらればこそ

「コリヤ由兵衛殿、アレ聞いてか、こちらが難
儀が悲しさに、やらふと思ふて盗んだきか」

「コリヤ」

「テモお前、盗んできた、金じゃといのふ。オ、
その優しい志、聞けば聞く程むごらしい。二親に別
れてより、そなたもわしも難行苦行、マア是程で年
があく、年はいくつと指をおり、数えて待った此の
姉が、連れ添う夫が殺すとは、釈迦でもよもや御存
じあるまい。世界の因果が固まつて、夫婦となり兄
弟とも生まれて来たか」

野中の井戸へ葬つて下さんせ。わしも共々野辺送り。
それから直ぐに此の梅は、島の内の木幡屋へ、苦界
三年うき勤め、憂きは重なる浮世ぞ」

と、またも思ひに胸ふさがる。押し入れあけて取り
出だす、結構はつこの下帷子

「この子に着しよとて買い置いたが経帷子になつた
か」

と、涙ながらに着せ代へる。水はじきにと由兵衛が、
渋紙出して上包み、湯桶の代り渋桶の、ふたはなく
とも二人して、担ふて行くか葬礼の志ぞと抱へ入れ

「かうなろうとは知らずして、『姉様わしは此暮れに、
すみを入れたら大人役、モウお前の苦にならぬ』と、
嬉しがるのを聞くにつけ、来る正月の藪入りには、
おとなしい顔見よものと、思ふた事言ふた事、夢に
なつたか悲しや」

と身をもだえ、泣きどどくこそ道理なる。

由兵衛は長吉が志を聞くにつけ、胸に盤石押さ
るゝ心地。涙かくして

「コリヤ長吉。斯うなる事も因縁づく。追付け縄目
の恥を受け、あとより続く此の身体、礼は冥土でゆ
るゝと言はう」

とせまりし一句に今際の長吉

「コレ由兵衛様。たよりのない姉様の事、頼みます
る」

と懐の金投げ出して落ち入れれば、わっと泣き出す小
梅を押さへ

「コリヤ女房、その泣き声が外へ洩れてはむごい目
を見た甲斐がないがや、どふぞ死骸を隠したい」

と云ふに是非なく涙を押さへ

「我と我が手に死場所を、見て来たというたが遺言、

と、もだえこがれて泣き沈む。

小梅も梅の花散らし、やがて茜のしるべまで、回
向する身と白玉の、つゆと消え行く弟宇を、頼むは
弥陀の極楽や、聚楽町の夜の露、消えなん身こそ、憫
なけれ。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください